

越えてきた山々 ©

昭和四十六年十月二十日印刷
昭和四十六年十月三十日発行

著者 田中澄江

中野区野方二―二五―七

発行 丸ノ内出版

千代田区丸の内二丸ビル五階
(電)二〇一―二八四三
振替 東京四〇二六七

印刷／精興社 製本／謙文社

定価七〇〇円

越えてきた山々／目次

Ⅰ 山ゆき

立山から槍ヶ岳まで 2

昔の山道 16

槍ヶ岳 19

七年目の山 22

母がゆく山 25

私の好きな黒部五郎岳 40

大雪山に女ばかりで 42

紬よりも大雪山 45

歩く 48

山を慕う 52

自然が好き 60

旅先の山で 65

Ⅱ 山の仲間

風変わりな登山会 76

高水会のこと 80

山を歩こう 84

私と山の仲間 87

案内者 90

登山は若ものだけのものか 98

3 山の花・野の花

私の山の花 108

信濃恋い 117

にくい盗伐、花盗人 120

いとしい植物たち 122

武蔵野の秋草 125

ハワイの二世青年と水芭蕉 130

野の道 137

4 山好き

ずうっと行って、また行って 148

妻の息抜き 152

やせる苦勞 156

青年の死

歩くことのすすめ

スキー無縁

バスの旅のこと

女とズボン

山好き

5 山への祈り

山と母の死と

われ眼をあげて

神を求めて

山と祈りについて

あとがき

装幀／中井幸一

カバ―写真／川口邦雄・塚本治弘
口絵・中扉写真／三木慶介・越統太郎

立山から槍ヶ岳まで

その前の年、娘をつれて上高地から槍ヶ岳に登り、北アルプスの表銀座とよばれる喜作新道を経て燕岳に至った時、いささか心が和んだ。

二五年前結婚しようとして、好きな山歩き、最後のルートをここに定めたのだが、たまたま夫は山よりも芝居が好きで、遂に実現を見ず、いまにきつと生まれた子供と一緒に登ろうとひそかに誓って宿願を果たしたのである。一年たって、立山から薬師岳、黒部五郎岳、三俣蓮華岳を経て西鎌尾根から槍ヶ岳、そして上高地に下りるという計画を『婦人公論』から持ちこまれた。

白馬岳を北アルプスの一年生とすれば、前者は小学校三年生、後者は六年生コースに当って、相当の経験者でなければ入らぬとか。行程も長く、いったん入ったら、歩きつくすよりほか帰れない。私の力にはあまる山ゆきである。しかし、とかく自分を非運と思って何かに挑みたくなるのが生まれつきらしい。同行は『婦人公論』の近藤信行氏、松屋デパート山岳部の小山等氏、上智大学の先生尾崎賢治氏、いずれも二〇代である。加えて写真の三木慶介氏、みんな一流の山男ばかり、こんな豪華な山旅に

恵まれることも少ないであろうと、氣負いごころにせきたてられて引き受けてしまった。

六月九日。曇天。二一時一五分の急行「北陸」に乗った。夫と娘がホームまで見送りに来た。ここで写真を一枚とってもらう。山姿の妻と、平服の父娘と。もしかして、これが別れになるかもしれないと、ふっと思ったりする。

六四キロの食糧その他はチツキで別送。私の個人装備の中で特別なものはお茶道具。懷炉および懷炉灰、レタス、セロリを一貫目、レモンとそのしぼり器。化粧料としてはアストリンゼンだけであった。

第一日 立山に入る

十日。一等寝台車ではあったが、あまり眠れぬままに富山着。七時半、駅前の食堂で、井一ぱいの飯を半分食べる。大福も二個食べる。日頃はふとるのがいやでこうしたものはあまり食べない。立山線の電車から下りてケーブル九分。美女平につくと、立山ガイドの志鷹光次郎、佐伯豊太郎、佐伯民一の三氏の出迎えをうけた。ほかに中部山岳国立公園管理員の沢田栄介氏、五色ヶ原に新しく山小屋を建てようと計画している志鷹義弘氏など、同勢一〇人となって、一〇時半のバスに乗り、約一時間で弥陀ヶ原の追分に到着。残雪は約五〇センチもあり、弥陀ヶ原観光ホテルもひっそりとしていた。

午後一時、ゆるい登りを今宵の宿泊地地獄谷へと向った。積雪はだんだん深くなり、

それにつれて新調の登山靴は重く、三時半、天狗平に着いた時はベンチにのびてしまった。第一目でこんなありさまだとしたら、これからはどうなるのだろう。軽いキヤラバンシューズにかえようとしたら、これが汽車の中に忘れて来てしまった。地下足袋を借用してやっと自分の足にもどった気持になったが、雪道には足が濡れて疲れると豊太郎さんは言う。心まで青ざめた思いで、帰るなら今のうち、帰るに帰れぬ深山幽谷で、『檜山節考』のおばあさんのように、ひとに負われるようになったらどうしよう。重い気持で、雪山のスロープを上ったり下りたりした。

午後五時半、こだけ雪原の中に、灯のある雷鳥荘に入る。谷からひいて来たゆたかな硫黄泉に全身を浸してやっと元気がでる。晩食は食糧係小山さんのつくったライスカレーにかんづめと味噌汁。ふるまいのビールが並んだけれど、一ヶ月前から膝が痛いので自重した。山の怪談におどかされ、こたつに入って寝具を三枚かけて九時就床する。星のない夜空で、風が出てきたらしい。

第二日 立山から五色ヶ原へ

十一日。六時五〇分出発。曇天。雷鳥は雨をよぶ鳥とか、ギャア、ギャツ、と暗い声が雪原にひびく。降雨にそなえてヤッケを着た。ビッケルを手に、雪の斜面を切って登る。岩ひばりの死骸があったり、野兎の足あとが点々とつづく。山はまだ生きものたちにはきびしい冬なのである。

堂堂着八時。積雪は二〇〇年前からの登山者用山小屋を埋めて、屋根だけが姿を見

せている。眼の前に、山崎カールとして知られたU字形の水河地形が見られる。九時立山と浄土山の鞍部、一ノ越に着く。後立山連峰との間に黒部川の峡谷がひらけ、関西電力のダム工事建設場が見える。

立山頂上を往復しようと登りにかかると空が晴れはじめた。膝の痛む左脚をひきずるようにしてゆくりと進む。立山は私にとって二つ目の三、〇〇〇メートル峰である。白く光る花崗岩の岩山で、古代びとが神々の住む所としたのにふさわしい威厳がある。背後に剣岳の、空を突き刺すような鋭い山容が迫る。雲煙の彼方、槍の穂先も小さく見える。そのはるけさを思えば、安閑と眺めてもいられず、そうそうに下山し、無人の一ノ越小屋で昼食をすました。一時、浄土山の登りにかかる。富山大学立山研究所の建物もすぎて、竜王、鬼と岩場の多い上り下りがつづく。地下足袋の指もとが痛む。午後三時雨が降って来た。光次郎さんたちは、これから五色ヶ原まで、いくつかの難所があるから、研究所か一ノ越の小屋にもどって一泊した方がいいと言いだしたが、近藤さんの意見で、やっぱり前進することになる。光次郎さんは、その時「そうですか。ではおひきうけしました」と一言物しずかに言い、その言葉のたのもしさがふっと胸に迫った。

難所はまず二つの大きな雪渓であった。光次郎さんは横なぐりの雨にたたかれながら、先にトラバースして私の通るためのステップをつくってくれた。やつのことでガラ峠にかかれれば雨はいよいよ強く冷たく、ビニールをかぶれば視界がきかず、ヤツケの中まで水がしみ通って、雪のしみ込んだ足が痛みはじめた。ガスもたえず去来し

て、五色小屋に上る道は、深山ざくらのうす紅のつぼみが、夕闇にあたたかい光を放っていたが、私は意気地なくも泣きべそをかいていた。一足ずつ岩にとりつく足の重さ。どうしてこんな苦しい道を歩かなければならないのだろう。「もうちょっと、もうちょっと」と、雪の斜面を導く光次郎さんのがっしりした後姿にすがるような眼をそそぎ、一步一步をやつとの思いで上がった。

午後六時、先着のガイドさんが、落葉松の枯木をぼうぼうと燃している小屋に入る。心ない登山者に羽目板がところどころ外されて、そのすきまから入った雪が、階下に三〇センチを越えている。ここで白馬山麓の細野のひとたちといっしょになる。関西電力にたのまれて雨量計を運んだり、黒部川水源地帯の雨量を測定して歩いているのだという。下着までぐっしよりの衣類をとりかえて熱いレモン汁をつくってもらい、屋根裏の二階でシュラフザックの中に入った。雨の洩れないところを求め、肩すれすれによその男のひとたちと並んでぬるのは、いずこも同じ山小屋のならいだが、五人ぐらいがいびきをかいていて困った。一方がおさまれば一方がおこり、大小、連続、断続、さまざまで、眼はいよいよ冴えわたってきて眠れない。

第三日 五色小屋に停滞

十二日。五時、隣りで三木さんが携帯ラジオの気象通報を聞いて、今日は休みと言う。安心して少しうとうとした。

朝食はあざみの葉のおかゆである。焚火をかこんで、光次郎さんから、松尾峠の話

を聞く。彼はいま六二歳、長年山で生活してきたひとだけあって、実にやさしく、度胸もいい。大正十二年、日本における近代アルピニズムの開拓者として知られる板倉勝宣、榎有恒、三田幸夫三氏がはじめて厳冬の立山に入って松尾峠で遭難した時、一人についていたガイドの二人の現存者の一人である。

その出発の朝のこと、板倉さんの飯盒の中ぶたがアツという間に溶けてしまったという。減多にない現象で、あ、縁起が悪いなと思ったという。板倉さんはその前年、槍の北鎌尾根を登ったほどのベテランだが、厳寒の吹雪の中で方角を見失ってさまよううち、疲労凍死した。

沢田さんは井上靖さんの『氷壁』で扱われたナイロン・ザイル事件の渦中のひとで、昭和三十年一月、奥又白にベース・キャンプをおいて、前穂高東壁登攀の時、ザイルが切れて友人を失ったのであるが、販売店の保証つきを信じて使用したナイロン・ザイルに命を託して、青春に惜別した友について語る。鋭い岩角でザイルが切れたことは正確な事実であったにかかわらず、メーカー側による遭難のあとの実験は、その抗張力の強さだけを示す一方的なものであり、使用者の不注意であったという非難まで被らなければならなかった。名誉毀損で訴えても取りあげられなかったという。山を愛するものは責任感が強く、自分自身の行動に忠実である。うそいつわりを憎み、互いに信頼しあえる仲間を持つことができる、と沢田さんは焚火の焰を見つめながら語りつづけた。

焚火のまわりに沢田さん持参の最中をいただいて、ずらりと並んだ九人にお抹茶を

さしあげる。ただし、ズボンですわるのはいやだから、片ひざをたてての風流である。

午後にかけて雨が上がり、雪の五色ヶ原を散歩した。

盛夏には一面の高山植物にいろどられるそうだけれど、雪がとけた湿地帯には、うす青色のみやまはなごけの群落が珍しかった。この夜また一睡もせず、明日の山行にひびくことを思ってた。

第四日 越中沢岳からスゴ乗越へ

十三日。明け方、枕近くひそひそと相談の声を聞く。「どうも澄江さんはあぶないから、ここから下したらどうだろう」「いや、ザックに入れて首だけ出して運べばいいさ」。何も聞かない顔をして、朝四時の出発。天気は上々。今日こそは弱音をはくまいと思う。

体重一八貫、一日や二日なくても消耗し果てることはあるまいと度胸をすえる。

沢田さんと義弘さんはここで帰る。どうせ追いつかれてしまうので、皆が後片付けをしているうちに先発する。越中沢岳に登る白びの森の中で光次郎さんが熊のあしあとを教えてくれる。ちょっと前に通ったらしいと言う。熊は人間がそばにいても向こうでは気がつかない。立山には熊と格闘したり、かみつかれたりしたひとがいくらでもいると聞かされてぞっとする。

白びの森をすぎてぐんぐん高度を増し、這松地帯になると、黄ばなのしゃくなげが咲き出した。空も晴れて、美しい尾根道だけれど足の痛みはひどくなって、全身の神

経が集中する。雪溪のトラバースが三回。一步スリップすれば何百メートルか、黒部の谷まで転落しなければならぬ。木の根にしがみつき、岩の上を這い、越中沢岳を越えた時が午後一時。

薬師岳の登り口、スゴの小屋近くに雨量計をとりに行った細野の人たちがもどって来てすれちがう。近藤さんが知らぬ間に腕時計を落としたと連絡あり、帰るみちみちさがしてくれとたのむ。やがて谷間にこだましてあったらしいと声。民一さんがすぐにもどる。せっかく登った急坂を惜しげもなくスタスタ下りてまた登る姿がたのしい。しかしその姿は木立に消えてなかなか帰らぬ。出発してスゴの峠で、あとからくる近藤さんたちに谷をへだててあったかと聞く。手でないと返事。三木さんがあれば大声で言うよと言う。時計は鎖だけ見つかったが、民一さんと細野の人たちは谷の方に下りてさがしてくれたのだそうさ。乗越(のっし)にはビッケルに感電して遭難死した青年の追悼碑が立っている。

二時半、白びの森の中に、雪にうずもれた無人のスゴ乗越小屋につく。薬師は明日のことになり、ガイドさんがすぐふとんをブリキの罐から出して屋根の上に干す。水がないので、光次郎さんら二、三人がスコップを持って池をほり出しにゆく。池と聞いてそのほとりで水浴をしたいと思ったが、二メートルの雪の下によりやく直径三〇センチのうす濁った水たまりを見ただけである。夜はしめった焚きものにガソリンをかけて焚火をする。あまり煙いので戸外に出ると、しんかんとした深山の夜気を切って、けたたましく鳥が啼いていた。中空に鋭くみがかれた鏡のような月。

第五日 薬師岳を越える

十四日。晴天。五時出発。駒鳥のよく鳴く朝だ。今日は薬師岳を越えるのだと思うと、緊張してくる。黒部の上廊下とよばれる深い谷を真下にして、幅七、八メートルの雪庇のつづく尾根道をゆく。先を歩く光次郎さんが、かもしかのあしあとを教えてください。雪を横切って走っている。けもの話をする時、光次郎さんは、生き生きとする。

六時、雪がとれて黄ばなのしゃくなげの群生する薬師の本峰にとりつくことになった。加賀の白山から飛驒の山々が幾重ねして青々と煙って見える。苦しみあえいで越えてきた山々が後方からしっかりしっかりと声をあげて応援してくれているようだ。

一時半、北薬師頂上。一時半、薬師岳頂上。その岩尾根は、東面する薬師の壮大なカールの上をゆく。片足の痛さをかくして、無理したせいか、今度は反対側が痛くなり、歩きたびにとび上がらんばかりである。懐炉を出してもらって、もっとも痛い方にしぼりつけ、頂上の岩の上に身を投げかけて、物も言えない。

この頂きの眺めはまことに素晴らしかった。南に木曾の御岳から乗鞍、穂高、槍。

そして水晶岳、針ノ木岳、鹿島槍、五竜と後立山連峰がつらなり、剣、立山と中部山岳のほとんどを一望のもとにおさめる。北面する山々の谷々にことごとく雪が深いかげをつくって、その稜線のきびしさはどう人間がこれに挑もうとも、所詮は人間の小ささが屈辱的にみえるだけではないのかと思えてしまう。薬師岳の頂上の祠にはさび